航空研究センター設立にあたって

航空研究センター長
1等空佐　**福島　　睦**

多くの方々の御尽力により、このたび無事に航空研究センター（以下「センター」という。）の新設を迎えることができた。新設にあたってはこの10年の間、幾多の議論を経てここにたどり着いた。この事業に携わった方々、そして影で支えていただいた多くの方々には感謝の念に堪えない。この場を借りて心より御礼申し上げる。この産声を上げたばかりのセンターを、航空自衛隊（以下「空自」という。）の知的基盤として、最大限に機能発揮させることが私のセンター長として第１の責務であり、新設のために御尽力いただいた皆様の熱い思いと期待に応える道と考える。一刻も早く活動を軌道に乗せ、期待される成果を創出できるよう全力を尽くす所存である。では、センター新設にあたり、センター長としてその設立の意義をどのように捉え、どのような活動で成果を創出して皆様の期待に応えようとしているのか、私なりの考えを述べさせていただく。

創設60周年を迎えた空自は、創設以来、装備体系研究を中心として研究開発体制の充実を図り、装備品等の質的優位の確保に努めてきた。しかし、冷戦終結後の国際安全保障環境等の変化により「存在する自衛隊からより機能する自衛隊」というキャッチフレーズが白書に登場して早10年がたつ。この間、統合運用体制への移行等、着実にその歩みを進めている自衛隊である。この中で我が空自は、再度足下を見つめ直し、未

来において「機能する航空自衛隊」を担保するために防衛方策研究の充実を図る必要性を確認し、このセンター設立に至ったのである。

国際社会の不安定要因はますます増大するばかりであり、北朝鮮による核やミサイルの開発、東シナ海防空識別区設定に代表される中国の力を背景とした現状変更の試み等、我が国を取り巻く安全保障環境は厳しさを増す一方である。昨年末閣議決定された国家安全保障戦略には、国家安全保障を支える国内基盤の強化と内外の理解の促進のための取組の１つとして「知的基盤の強化」が挙げられた。そして同じく閣議決定された「平成26年度以降に係る防衛計画の大綱」（以下「新大綱」という。）には「防衛力に求められる多様な活動を適時適切に行うためには単に主要な編成、装備等を整備するだけでは十分でなく、防衛力が最大限効果的に機能するよう、これを下支えする種々の基盤を併せて強化する事が必要不可欠である。」との考えが示された。その主要事項の１つとして「知的基盤の強化」が挙げられている。国家安全保障戦略と新大綱に知的基盤の強化が示されたこの時期に、空自はかねてから検討を続けてきたセンターを新設した。正に時宜にかなっていると考える。

激動が予想され、防衛力に多様な役割を期待されるこれからの時代に、センターは空自の知的基盤として、空自の進むべき道、エア･パワーの未来を照らすとともに「知」の側面から機能発揮の下支えをする役割を担う。我が国のエア・パワーを最大限効果的に機能させるための「知」を創出する存在、これがセンターである。装備品等の質的優位の確保は不可欠要素である。それを基に空自は、優れて質の高い航空防衛力をどのように整備、運用していくのか考察し、部隊が駆使する戦術をしっかり導き、国家安全保障戦略の目標達成につなげなければならない。そのためには防衛戦略・作戦レベルの優れたビジョン、コンセプト、ドクトリン等が不可欠であり、激動の時代にあってはそれらが状況に応じて適時適切に創出・運用され、防衛力が最大限に機能発揮されなければならない。我が国唯一のエア・パワーに関する研究機関であるセンターは、エア・パワーに関して、防衛戦略レベル及び作戦レベルの研究を行い、

国家安全保障戦略と現場における戦力運用（戦術等）の間の連結を知的にサポートする。航空防衛戦略や将来保有すべき航空防衛力の研究等においては、防衛研究所、統合幕僚監部、航空幕僚監部、航空開発実験集団等と密接に連携することになるだろう。エア・パワーの運用に関する研究等においては、実動部隊である航空総隊、航空支援集団、後方担当機関である補給本部、補給処等との連携が重要である。また、成果の普及・教育という面では航空教育集団等との連携も欠かせない。統合における効果的なエア・パワーの運用について、その特性を最大限に生かす知の創出もセンターの使命である。このため、エア・パワーをシー・パワー、ランド・パワーと一体化させ、部隊等を効果的に運用するための研究は不可欠と考える。統合幕僚監部、統合任務部隊に対してもエア・パワーの運用について知的に貢献していきたい。もちろん、宇宙・サイバー空間についてはエア・パワーと密接不可分な関係にあり、この分野の研究を怠ることは許されない。したがって、センターの行う研究は、上下左右の部隊等はもとより、様々な機関等との連携・橋渡しを常に意識しつつ、他に代替のないレベル・領域で質の高い成果の創出を目指していきたい。

センターの研究は、①ドクトリン研究、②戦略理論研究、③事態対処研究の３つの分野に大別され、それぞれに室を設けてグループで活動し、「知的創造」を目指す。これらのグループはそれぞれに特性のある重要な分野を研究することとなり、専門的に深く掘り下げていかなければならない。しかし、各グループ及びそこに所属する研究員は、脇目も振らずに自らの担当正面のみを狭く深く掘り下げるのではない。それぞれが他の分野について十分に理解し、密接な連携を保ち、相互に影響し合いながら掘り下げていき、成果を創出していくことが重要である。

また、組織の内部だけの閉じた知的活動では研究の幅や奥行きには自ずと限界がある。陸上、海上自衛隊の研究機関、防衛研究所をはじめとして、部外や海外のシンクタンク等の研究者と積極的な知的交流を図り、多くを吸収しつつ、啓発し合いながら活動の活性化を図っていきた

い。戦う集団が用いる正奇の策は創造的かつ革新的でなければ、勝利はおぼつかない。センターが目指す活動の第１の特徴は、センター内部においては研究領域の枠を超えた活動を行い、さらに、外部との積極的な知の交流を図り、これらの相乗効果（シナジー）をもって創造的かつ革新的な研究成果を創出することだ。

センターの研究は、前述した戦略理論研究と教訓収集業務を含む事態対処研究などの成果を結集して、ドクトリンを創出することに帰結する。前者は戦略、安全保障など理論的な幅広い研究が中心となる。一方、後者の教訓収集業務については、収集された教訓を知的資産として管理・活用することが中心となり、この資産は、正に「実践知」として継承していくものである。このようにセンターは、学術をベースとした理論研究や図演やシミュレーションなどを通じて対処構想などの考えを導く「演繹（えき）的アプローチ」を行う。そして、部隊等の活動をシミュレーションで再現することで得られる事項や教訓収集により形成された実践知を基に「帰納的アプローチ」も行う。この両面からの研究を融合させて真に役立つ成果の創出を目指す活動、これをセンターの第２の特徴としたい。

これらの活動を続けていくためには、実際に活動する部隊や、外の世界に、目をしっかりと向ける意識が必要である。現場で起きていることを敏感に感じ取りつつ外から「知」を貪欲に吸収する。そして内外に積極的に成果の発信を行っていきたい。成果を発信すれば何らかの評価が返ってくる。この評価を真摯に受け止め、次に生かす姿勢が重要であり、それが質の高い研究、利用価値のある成果を創出する好循環へつながると確信する。内向き思考や自己満足に陥ることは厳に戒めていきたい。

センター新設にあたり、私なりにその意義と目指す研究活動について述べてみた。我々はエア・パワーに関する国内唯一の研究機関として、ユーザーが欲する時に（できれば、それを見越して先行的に）、望まれるレベルにある研究成果を提供することを目指している。そしてエア・パワーの未来の可能性について提言してゆくことにも挑戦したいと考え

ている。私は初代センター長を命じられたことを大変光栄に思うとともに、その責任の重大さに身が引き締まる思いである。センターの創出する成果が「真に機能する自衛隊」に大きく貢献できる日が近いことを確信して、一歩一歩前進していきたい。関係各位には、暖かく見守っていただくと共に御指導御鞭撻（べんたつ）をお願いしたい。